

おみくじマイメモリー

- PROGRESS substory -

あけお



1

こたつ、みかん。

ぬくぬくぽかぽかの体に冷えたみかんが染み渡る。いやあ、やっぱり冬と言えばみかんですなあ。

「……お前な、一体いつまであたしの部屋にいるつもりなんだ？」
「あ、姉さん（ねえ）もみかん食べるっすか？」

「いらねえよ。大体何でもかんでもみかんでごまかそうとするな」
「姉さんは目を細めて私を一瞥（いちめく）した。いつもならどきりとしてしまうが、私と同じようにこたつで暖（だん）を取りながらココアシガレットをくわえる姉に何を言われたところで威厳（いげん）も何もあつたものではなかった。」

一月三日、三が日ももう終わるといふこの日。色々あつた昨年（さくねん）も無事（むじ）終え新年（しんねん）を迎えた私たち姉妹は、それはもう誇れるくらいの寝正月（ねしょうづ）を過ごしていた。

「だって、あたしの部屋にはこたつないっすもん」

「あたしの金で買ったんだよ。お前が貯金（ちきん）してないのが悪い」

「しょうがないじゃん」。エアブラシとコンプレッサ―新調（しんじょう）したら貯金（ちきん）なんて残らないっ

すもん！」

「何になりたいんだお前は。はあー、タバコ吸いてー」

くわえたココアシガレットでタバコを吸うジュエスチャーをしたあと、頭をこたつのつくえに預けてうなだれた。

レッド・アイズという不良グループのリーダーとして一癖も二癖もあるメンバーたちを束ねたかつての姿は、そこにはなかった。さしずめ猫、可愛らしい猫ちゃんつてところだ。

「おい、てめー何じろじろ見てんだよ」

こたつに突っ伏したまま私にガンを飛ばしてくる。きつと外では見せない情けない姿が微笑ましくなり、私はくすりと微笑んで姉と同じようにこたつに寄り掛かった。

こうして私たちのお正月はふけていく……。

「……………つてえ……」

「お？」

「こんなじゃ駄目つすよ姉さん！」

立ち上がりざまにこたつをひっくり返しつつ私は叫んだ。宙に浮いたみかんは、姉さんがきちんとキャッチした。

私は胸を張り、宣言した。

「姉さん、初詣に行きましょう！」

「……………おい、寒いんだよ」

ひっくり返ったこたつの布団につま先を入れたまま、姉さんはそれこそ猫のようにじつと動かない。

「駄目つすよ！ このままだと私たちの一年間に夢も希望もなくなるつす！」

「夢よりも希望よりも、大事な今は今だろ。あたしはのんびりしてえんだ」

「それっぽいことごまかさないでくださいっ、もう！」

しかし姉さんは私の提案をことごとく無視して、黙々とこたつを元に戻し始めた。

2

「しっかし、人が多いんだよ」

「それ、六回目つす」

姉さんの眩きを指摘したところ、少しむっとした声で「うるせえ」と言われてしまった。

私たちは歩いて海葉近くの神社まで参拝に来ていた。嫌がる姉さんをこうして引きずりだすことに成功したのは、私がこたつのコンセントを引っっこ抜くという荒業を行使したのが決め手であった。電気を失ったこたつはどんどん冷えていき体を温めるお散歩という名目を幾度も主張して、こうして姉さんの軽いけど重い腰を上げたのだ。

神社は三日といえど、地元の人たちでかなりの混雑。明治神宮や神田明神に比べれば随分と敷地は狭いが、それでもそれなりに広い境内には出店もあった。とはいえ出店のお兄さんたちも夏祭りのようにがっつと話しかけてくることはなく、ただひたすらのんびりとしたお正月の雰囲気が神社を覆っていた。師走の喧騒はどこへやらといった趣だ。

吐く息は白くマフラーを巻いていない私の首は冷たい風でびりりとした。ここ最近は刺さるような寒さの日が続く。

鳥居をくぐり水舎の前まで来たところで姉さんは露骨に嫌な顔を浮かべた。

「えー、寒い中本気で水かけるのかよ。正気じゃねえぞ」

「身も蓋もない言い方はやめてくださいっすー。お清めなんですからきつちりしとかない」と

「神様信じてねーんだし、いいだろやんなくなつて」

「……それはせめて境内を出るまで言わないでください」

順番待ちの列ができ始めていることに気付いて、私は姉さんを急かした。姉さんは気怠そうな仕草で右手の指先にだけ水をかけた。よつぽど寒いのが堪えるのだろうか。

左手、右手、口、の順番で体を清めていく。冷たいには冷たいが、作法だと思つと少しわくわくしてすぐに気にならなくなつた。

ポケットの中に用意しておいた五円玉を取り出して、お賽銭箱に投げ入れる。鈴を鳴ら

して手を合わせてお祈りをする。神様を信じているかといえれば少し悩んでしまうが、やっぱり信じているんだと思う。誠実でいさえすれば、きつとどこかいいことがあると思うから。

「なげーんだよ、種は。欲張りなんじゃねーの？」

お参りを終えて出店のある場所まで戻る途中、姉さんは私に訊ねた。

「お願いしたのは一つですよ！ ただ昨年のお礼から始めて近況報告、今年のご挨拶と抱負を言つてからお願いと考えたらどうしても長くなつちやつただけっす」

「どーせ聞いてないのに、よくやるぜ」

「不謹慎過ぎつすよ、姉さん！ それで、姉さんは何を願ひしたつすか？」

「……えーと、なんだけっか」

姉さんは皮肉混じりに笑つて肩をすくめてみせた。すっかりからかわれている気分になつた私は追及するのをやめた。

「じゃあ、私、わたあめ買つてくるつすからちょっと待つててくださいね」

「おー、あたしは座つてっから」

祭事用に臨時で用意された椅子に荷物を置き、お財布だけ持つて出店に向かう。

こうして姉さんと二人で初詣に来るなどいつぶりだろう。ぼんやりと記憶の端に残っているのは、私が小学校に入つて間もない時のことだ。確かおみくじを引いて私が大凶を引

いて大泣きをしたことがあった。しかも姉さんはこの時から変わらなず平気でからかってくるもんだから余計に拍車がかかり、我ながら手が付けられなかつたような気がする。

小学校低学年の私は泣いてばかりだったからきつと、こんな些細なことを姉さんは覚えていないだろう。あの時姉さんは、どうやって私を泣き止ませたんだっけか……？

昔から変わっていないのだなあと思うと、何だか微笑ましくなった。

私の顔よりも大きいわたあめを受け取って、姉さんのところまで戻る。すると「うわーん」という泣き声が近くから聞こえてきた。

人ごみの中、まだ6歳くらいの男の子が泣いていた。一人で見るところを見ると、どうやら迷子の子のようだ。

「おい、種……はあ、面倒に首突っ込みやがつて……」

姉さんの言葉を聞く前に、私は男の子に駆け寄っていた。

「君、お母さんと来たっすか？」

「えぐつ……、えぐつ……おかあさん、おかあさんどこおー！」

「やっぱり迷子っすね。この子のお母さんいませんか？」

声を張ってみるも、返事はない。この人ごみと喧騒ではどうしようもない。

「うわーん、うわーん！ おかあさん！ びいい」

こうなるともう、小さい子供は怪物だ。試しにわたあめを一口あげても全然受け付けず、

泣き止む気配がない。こうなったら一人一人聞き込みをして、この子の母親を探すしかないのだろうか。

歩き出そうとしたところで、私は男の子が何かを握り締めているのに気がついた。名前が分かるかも、と期待しながら見せてもらいくしゃくしゃのそれを広げると一枚の長い紙であった。何かと思えばおみくじで、少年の名前を知るヒントにはなりそうもない。

「えぐつ……ぼくがきょうを引いちゃったから……、おかあさんどこか行っちゃったんだ……！ うわあああん」

「あ、えつと、どうどう……」

男の子はおみくじを見て思い出しのだろう、さらに大きな声で泣き始めてしまった。

確かにおみくじには『凶』と書かれていた。男の子からすれば、新年一発目からの不幸なのだろうけれど、それとお母さんが見つからないのは関係がない。

「つたく、男なのについてまでも泣いてんじゃねーぞガキ」

「姉さん！ 迷子っすから、そんな言い方……」

待ちあぐねたのか、姉さんはふらふらとやって来た。

「ちよつと来な」

不機嫌そうな声で男の子に言い、そのまま彼の手を掴み小走りて人ごみを抜けていく。

「あ、ちよつと姉さん！」

私は置いていかれないように、人ごみをぬって姉さんを追った。

姉さんは出店の並ぶところから少し離れた大木の前で止まる。男の子は自分がどうして連れてこられたのか疑問なようでそわそわしながら辺りを見渡していた。すぐにお母さんはやっぱりここにいないことを思い出したようで、再び泣き始めてしまった。

「うっせえ。ほらよ」

男の子の胴を掴み持ち上げると、姉さんは肩車の格好で男の子を自分の肩に座らせた。そして、大木の根元までずんずんと近付いた。

「ちよつと高さが足りねえな。おい、種」

「え、ええっ」

戸惑いつつも姉さんの言う通り、私は四つ這いになった。背中にぐつと体重がかかる。姉さんが私の上に乗っているのだ。一体何を……。

「おみくじで凶が出たんだろ？ だったらその枝に結べばいいんだ」

「木……？」

上の方から、男の子との不思議そうな声が落ちて来た。私はぐぬぬと踏ん張りながら姉さんの足場を続ける。私が反抗すれば男の子まで落ちてしまう。

「悪いモンは全部木が吸ってくれんだよ。ほら、早く」

「う、うん……」

姉さんが言うのと、男の子は泣くことを忘れて一生懸命おみくじを枝に結んだ。見えてはいるが、ふらふらと揺れる姉さんから男の子の試行錯誤している様子が伝わって来たのだ。

「これで……だいじょうぶ？」

「ああ、ま、これでプラマイゼロ。おめー次第つてとこだな。それによ……」

小さい子供にプラスマイナスの話をしても分からないだろうなあと思いつつ、私は男の子が完全に泣き止んだことに気付いた。

そして姉さんは言いかけた言葉を続ける。

「この高さなら、おめーの母親も見えんじゃねーの？」

3

「よかったつすねあの子、お母さん見つかった」

「まー別にあたしらが何もしなくたって、昼間なんだしすぐ見つかっただろ」

姉さんは私の買って来たわたあめを頬張りながら、シニカルな口調で言った。

男の子は姉さんの肩車で、人ごみの中あたふたするお母さんを無事発見できたようだ。お札を言われたが、姉さんは口々に答えずに私の手を引いた。

「でも珍しいっすね。神様を信じていないのにおみくじの話を信じてるのって」
「あ？ 別に信じてねーよ」

意外な答えに、私は姉さんに「じゃあどうしてっすか？」と訊ね返した。
「昔よ、どっかのバカが同じ理由で泣いてたとき、同じことで泣き止んだのを思い出したらよ。あたしだってガキの頃くらいは神様ってもんを信じてたからな」

ぶっきらぼうに答えた姉さんに対して、私は何も返せなかった。バカ呼ばわりされたのは多少心外だが、それ以上に嬉しかった。

思い出した、あの時私も姉さんと一緒に大凶のおみくじを木に結んだのだ。全く——忘れていたのは私の方であった。

「あ？ 種お前どうした、変な顔して？」

「何でもないっす。それより姉さん、私たちもおみくじ引かないっすか？」

「いーやーだ。今はそういうの信じてねえっていったら」

「じゃあ、私だけでも行くっす！ ついて来てくださいっす！」

嫌がる姉さんの手を引いて、私たちは神社まで戻った。

一時間もしない姉さんのお出かけだったけれど、私はとても満足だった。帰る頃には体はぼかぼかしていて、どうやら今日はもうこたつは不要なようだ。

姉さんとの初詣、私が何を願ったかは——内緒っす。

ちなみに私の引いたおみくじの結果も、あの男の子と同じ凶。それでも私は、あの大木に結ぶことはせず、綺麗に折りたたんでお守り代わりに持ち帰ることにした。

「さてと、ちょっと稽古でもするっすかね！」

こうして持つていればきつと来年も再来年も、今日のできごとを忘れないだろうから——

■企画：あいうえおカンパニー

■著：あけお

■発行年：2014年1月1日